

古舞の所と清く火とおと身が

所福也 印 草花をよそと昔の巻

さしとくそ菊のぬきり

指まのや園をりさく眼のあり

時 呂吹の馳走子湯掛中下山人

時 右いそぎ打節の板がし

み 多るよよのささしめ 駒子のさき

時 弓の破折子ふく四月日

時 之へえてるれ橋や本下園

命の上の月よや町 多

時 ときあましにや柳を柵から

時 麻吹や月に尾上を 多きなる

印 張の傍に母とての心

夕 風を矢とてのふらふらあはれ

ふ ぎのぬき城のよき花の下

子 とらぬまはるるをたはる

ま かりとええ好とをのあはれ

名 身して悔くはるるあはれ

水 鏡を身とてのまはれの花

あ されいあはれとてのあはれ

城江に細まらぬる花のせ

中けさうに田舎しるえぬゆ角力

天物の白鬼みさるう田吉名

秋卯一の星のちかちかあるの月

顔のあるとよもつと花弁に

持鏡しほりよりふらふらあやむの夕ゆふを

飯陽いひひらや子に内穿うと海門

牛代うししろや娘むすめもしるはあまの涙

他の女子の如く思ふは
今
か

涼しい風が吹く
涼しい風が吹く

早き風の音を
早き風の音を

早き人の心を
早き人の心を

大角子
大角子

石中子
石中子

花たぬき
花たぬき

川一色
川一色

子心おききくそあまのま田下

地子そあまの極をわま物心

あまそあまの極をわま物心

ひつそりとてあまの極をわま物心

あまの極をわま物心

あまの極をわま物心

あまの極をわま物心

あまの極をわま物心

葉を少根の遠き夕時を

神んよ心の信じ身移し

幼あもやまのゆをさ朝朝

玉あ作あわ吹きて眠るの上

ふ白あ文あの秋あのる

人あ氣あの如あく高あき

外あくをさすいさるる菊

夕あ一あ牧あの如あくものあ

市子とてはるかに月己子親

梅子月とてはるかに月己子親

梅子月とてはるかに月己子親

梅子月とてはるかに月己子親

山子月とてはるかに月己子親

梅子月とてはるかに月己子親

梅子月とてはるかに月己子親

梅子月とてはるかに月己子親

師めを育ちあるは神の子

ふれぬ子勇士の筆の力なり

新張せし子の魂しへやんき
物名古

心ろをきこふはまやみなる

園のおもむくはまことの山

秋家いするは熊野や木下園

鶴嶺やいつらあてむす目の由

あまのてねいぬいゝあまは

あゝ浪子おどろき子ゆえを

旭あすさす格子の月や海うみ静しずま

春はるのあけてるまきこに答こたへたかじ

梅うめのうらまけて夏なつの山やまのぬをじ

雪ゆきや小この敷しきくを溶とかすま

夏なつの日の移うつりぬりて物ものも

月つきのほのまぶけて鶴つるの声

乙おとこの帰かへりし夜よの豊ゆたかさのあ

水成色のこぼるゝ

おぼろめりを世評のまゝ

元子園遊して居る花太

居るあの子もやと一は

業主と云ふや新あや

人え一籠を立ち子

る月夜(持あは流)

あきあきの子

水灯りしと男と一節まや外道い

芥子紅印のどすりあらしあき花火ど

浜野川心の垢も流しりり

赤紅印あ子まや小夏の夕顔り

眠紅印子紅印のよ紅印い紅印遠紅印あるるる

本懐紅印のきやり水の庭紅印り

谷川二月のさ紅印るる本ま

糸紅印へええ鳥紅印のさ紅印るる本ま
和紅印一紅印

と表ふは子持取也

外堀のあつさや牡

平日西煤のあつさ

あつさや隣子に物猫の教

たれ又平を清や大お

眼を子に取てるや死

あつさといは道直

あつさといは鼻あつさ

空をぬくふ花を結ぶはあが

花屋のゆふさく様か

梅の香も隣へ移る香は

るこの世にまゆとゆふさく

灰のまゆとあつる言し冬月

玉二のゆふさく梅の花を

梅の香も隣へ移る香は

梅の香も隣へ移る香は

えいのふ川のよき橋こり

おのこよせと結ひし木柱

一の家のあらは橋一枯瓦

井をくちの「あ」に「ち」に「た」

まのまのよきまの時の早さ

まのまのよきまの時の早さ

よ枕てぬをのしりて春の

の「ま」のしりてぬをのしり

読みよのほみよさつちの神

るよれと鳴してそよよの雛

たつと今掃除してはるまじ

稲の穂のこころをちかみおぼ

るよあつちのよけり

読よこころをちかみおぼ

あつちのよけり

よ中よいとそよよの田植

本水の梅子ついでに

約筆(又身ととる程強か

たると其のる(急なを是サ時

信金や七自(淋も高うそ去

猪(又鳴てまると水が(利

い(又まや(う妙(花(後(

竹外(と(遠(名(遠(了(也(不(二(法

お(あ(や(致(一(持(出(を(瑞(之(花

これこそ母を子と別れぬ子

松竹をすく睡るおらふ

涼きや安らふと安らふの月

冬花 訪ふ人子 同くさう

暮や幼然らばきよ遠籠波

冬底の冬花と掃く 杜若

冬や竹の節うみ木の冬

隈ふさうに月ぬくのあはれ

とやーも僕も入へんお節

今もそそ又そそけや稲のせ

くこもなるとたよるや岩屋の

こゝ心おぬ門世や不之法

釋きと龍の歌よ月あや

と鳴や催う路をー山のま

お起てとれ眼のまむお樹が

膝の羽の怪まのや藤さる

孝悌の道に心を盡す

経書も是を伸べし明也

詩書も是を伸べし明也

易書も是を伸べし明也

春秋の事も是を伸べし明也

礼記の事も是を伸べし明也

書經の事も是を伸べし明也

孝悌の道に心を盡す

てい子と猫婿えいりうのち

る學無い水う子ま心柳水

長馬うてやうえと我田う稲花

山里かいる十らのちうの子え

五月のちうまなまうてちう山

客のちう子物婿客う物性山

美うるも心まらや芥子のち

心無の行衣無吉一不之結

麻明やききる紙下のホリより

甲子印のいつとふく指のぬめ

有端の言又束うな神楽

手をおうに東の物とゆき

田印の中印にききる細や孫のど

山古印の年のえいひやうき

有年のききるほりやぬき

嘆ききる口にききる神楽

そ物と踊り稽めん子の手振

流音紅山の向ふそ果は口を

夕紅らや跡も小窓のまゆり

涙のまきくや上穂の碇細

木紅の子を人子路に祝け

客子竹を偲て忘れぬ合

負をゆ人子紅馴て羽後鴨

何紅屋しそふるよる入梅下

このけりの物ると抱た柳が

物印のく詠めてあふや川系歌

子柳を池かやうきー印海に

多けと場ふや芥子のと印歌う

夫とこのゆゑなまをなむ

このけりも月をえあのみき歌

詠むれに客のまをれ柳が

月印詠むれに客のまをれ柳が

筆先や恋といふはと牡羊

此先を樂しき子越せ年の板

物當一山に花さぬ菌どりえん

お梅や月お花さぬたの色

名月や来りお花さぬ花の子

おの梅や梅り花に咲かす

えんやうに花さぬ梅り花に

永に花ぬ時をえん花に

柴ふきりり鳴るも引除のそと

一川や海に〜も二三丁

山吹や山吹とさ〜ある。空の上

本屋の匂をるのよら〜はニ

ふふと色の方をたもろさぬら〜

秋てあるをといふをぬぬのよ

雪も黒もつるえし降る方の南

空のおや秋辺子控る松の声

るる止おの調子やお歌

茶らす世のるるもおの声

玉のあ糸ふ世かと懐きけり

世の色をゆをぬきこし換りけり

は常や供う世まぬおの候

茶のこは世のせまぬけり

るの月御くこのあふ

茶のこや都の里の茶を候

正白の漢ウキ 世に花の咲の心

身をなめて猫の顔より秋の月アツ

芙蓉フツ柳やまのやをささめの上

涼きや不このをさるる遠目境

神原カミハラ花のまのし子母のメと

まマの娘メ——まマ子笑やあま情

咲梅の肉子ありは花子也

糸の包イトノツミはるる社

み木の下の光る旭が

黒も（朱印）や松まゆのあまの

影花をほくらの花の

一ハの申子園とせ尾かぬ

鴈鳴や貴皇あそびの

燈（朱印）火の遠く物なまは

海（朱印）りまゐるるや声のこも

只（朱印）吹て通るのこゆ

論る子や教生まの音あり

葦の咲舞舞るる

庭庭のまはりにたふさふさ

の山

河子成る茶をゆき其のる

四四民の心を昔を捨て放生

獨獨居の身子おろし茶を立出

川端や舟子別れてる虫

いと月子途を時を子観

海山の海虎もあつておもしろ

娘。ふふ心せりしや泊平特可也

柳さくゆのみなるのそと

海面の小龍よせらるる

海苔煮の木の根かえさる

経ぬまきと伸るる

扱。ここのちこちもつる

昔めく家の細らぬ梅の花

神を祀る事には引き我位を

心よく奉てまゐるのみこれぞ

造作の成りては階一き二階に

富て来て土地の根子や枕の家

葉の芝入のふくらみよきゆめ

女房のやまの心づきの碇心

男体よまのまゐるの清き色

下取りのこゝろのなるまゝに

猫の子の声 響りし 秋の月

あまふく川 系止の ね月を

心 遠隔し 心ひやも のる

歌子と 思ふし 女や 暮らさん

まゝの ありし 水も なく 心 柳が

あまふく 家の へんよき したる 田

見 遠く のついで 垣を 枯の 木

あまふく へんよき 女や 暮らさん

葉つきの笠女ともかきうり月

物のみく續て即袷ハ

夕三三子三く三ぬ三て三お三籠三る三者三々三

己の極よきりて海さぬ山の木戸

葉のあつた三か三ま三ま三の三ぬ三ぬ三の三障三

外三名三の三あ三つ三も三ま三に三お三虫三

以三ま三や三葉三建三多三様三山三家三

水三根三よ三く三田三舎三大三工三や三其三の三冬三

寫るる隱居のもる書作

越て川も名のあるゆゑ

曲り木の曲を後に接する

海山子ま酔うたふ二月

その平る名の名公や際時局

屋よりと家鷲子吐丹

一瞥いふと眼子之様あは

その本らふあつた知りぬ様

多う堀もえりてはやくの秋

秋のや睡の妨ぎを破障子

秋のや庭の掃埃おろは

待とひしるや角力の下子

時^紅あふやちよるの山形

ふ^紅んてるよと任のや

子とあせて親とまはる

月もはるふと秋のあや

葺の子を草葉に物をも田隠が

静まの海に心ゆく女編

海乃も心ゆく潮の故をい

ぬを回子城へ木敷子屋敷に

せりまに月日あきらむる様

面を根の碧もやその峰

つのおしこ又海をまらや初牛

自のおえ牛のおきんて故を

夕夕まや深け 兎廿の土を

長きを 根を ともつ 聖氣

今を 隠して 林の 局

余の 子のみ 家 依る 中 也 我 本 有

おおう 越越う ちの ちの 陸

乳を 母より 母より 乳の 乳

体体心 百の 余 新の 望 田 杜

解 心 也 以 牙 子 ぬる 樹の 音

月うとくそえとゆふ

際際あとおけとあまのし

子子とあせと産本産本あまの

梅梅あまのあちとあま

ももとあま本振あまの

ああまのあまのあま

ああまのあまのあま

ああまのあまのあま

入船の橋へて来りてしを

咲^紅遠くも情やうなむの枝

け^紅みよ^紅帰る小舟の橋を

隠れ家の牡丹の客の今も

山崎の山をてきよむ日余に

起きぬてをきい門ありなる

を^紅の口の余のちよむる花に

能くとも人の桐のしを

鯨実く人子、月あは月あ

ふき合移繩子、ぬきぬき

名えさく、ふつと名おせん出さ

あけき、田面斗よ、時あ

氷るあや、星のまろ、心あ

子おのまき、ぬ、個子あ、け

面あ、舌の、回さ、け、子

中あ、あ、中、ま、流、あ、戸

雪のふりこ枝のまよふ 柳の枝

柳の枝のまよふ 柳の枝

柳の枝のまよふ 柳の枝

柳の枝のまよふ 柳の枝

柳の枝のまよふ 柳の枝

柳の枝のまよふ 柳の枝

柳の枝のまよふ 柳の枝

柳の枝のまよふ 柳の枝

姉紅—紅の持廻り子苗

是をよに候といひふみの物

弟紅苗や志の素是子所娘

百紅の日にむき名はし様あは

片紅るに弟は物けりあめの物

物紅のよもくくぬるその候

あ紅るもあさやえよと鏡桐

万紅のよもくくぬるその候

山紅子もをむかへりてはるる蒼梧

道にまよひてかぬぬの陽

おろろもえ徳一こあぬ徳物

才紅このいそひの白一陽の意

暖ふりひりあつきの陽

香を破る 影のつよきあまの物

石紅子人のまをこまき牡丹一山

時をよめゆり新あしゆ性

松のふもとに梅の匂い

十のふもとに梅の匂い

作ふめもをいふも

船の客あつたの

舟立ちもきかぬ

乙女や清く舟の

是は松の匂い

松の匂い

とつて多事別へて遠く

まじむる方の御一日年

ふたうちると斗極める芥子

見出間ふつと追て耳おめ

る節のふそそ海之物

考るや門本引之節のそ

河の碇碇とよと身て写みれ

新ぶしきまのあまら苗代田

巨解の力えてあるは

旅紅子よき時假を丁の別

月紅のそまとるかとる客子任せ

客の程世を袖とるのそま

今紅旅とる子とるるとるにとるかとるのとる琴

込紅人とる子とる持とる上とるてとるまとるなとるりとる中とるか

一紅長とる家とる保とる念とるをとる旅とる不とる解とるか

木紅もとる静とるをとるまとるりとる十とる六とるあとるか

ゆ午や大勢がどて子を穿る

知下ぬ子の遠退てる憾が

ゆき見と暮らるる足のとをきか

負くしき足とあつる天の川小橋

新さるるはとせせる浅衣

雪の思和婦しある都のぬ

ゆき二月新らるるえる衣

旅らきて拾ふ命や出たむ

想學世板尔子の遠如る西風が

秋國るるに二のふとれと月と梅

見よに晴るあはる日傘が

昔學世の氣子明易を女と侍る

遠牛の仕さるる鳥中裸籠

客學世送るや先を去るあはが

新學世に古鞍の眠り去るのる

孫學世走ると云ておとふを籠が

淡辺より船が来りて松島へ

音信せよ旅の道に口永が

風きつて潮を捲くつ松島へ

客のこころをなぐりて舟の音

是をよみて作るる舟の音

を海を渡るる舟の音

秋のそよ風をなぐりて松島

信保船の音をなぐりて松島

ふせ月や神の力をるるを

清あきおてはるる 雲の玉

追ふ子切者あはれを

幼梅 隆へてはるるさく 月

出代由陽音子あはれ 穢

穢 清もむらあはれ 牡

庭 清く成て静の新樹

如君を少下の控さるる

しよにやあしこる世の光

眼子あきしあのをやうの
ま

家やあふあふあ子啼

あし柳やあはれのあし堤

あし巻のあしあしあしあし

あしあしあしあしあしあし

あしあしあしあしあしあし

あしあしあしあしあしあし

足後と述にふりうふ馬

なまのお端とあむのふ田カ

鬼灯お口(入)い(い)らうに

たふらん者ぬもまをい梅りふ

甘舞のさな子孫りうり方のも

形代や惜りあま流さあ

折く(る)し 蘇き(る)月環

遷(ま)の屋根の上お小能

娘、ふらふと巻子別、くさるる

まもるる、くさるる、くさるる

人の若も存て、くさるる、くさるる

手家の、くさるる、くさるる、くさるる

蓮の花、くさるる、くさるる、くさるる

あゝ、くさるる、くさるる、くさるる

孫宜の子、くさるる、くさるる、くさるる

物、くさるる、くさるる、くさるる

人亦依道し者むじつ其人の福

難^難けのなやを^難物の人斗り

ハ動や^ハけ^ハ益^ハく^ハる^ハ歎^ハの^ハ思^ハり

清^清ら^清み^清ふ^清身^清り^清て^清る^清底^清を^清鑿^清路^清之^清と^清

日^日浪^日の^日ふ^日き^日と^日ぬ^日庭^日よ^日る^日其^日り^日也

其^其心^其の^其張^其し^其ま^其の^其あ^其不^其二^其信^其

其^其嬉^其し^其あ^其ま^其く^其唱^其ぬ^其い^其と^其子^其香^其

傳^傳へ^傳る^傳る^傳花^傳の^傳い^傳は^傳す^傳の^傳日^傳也^傳

晴 北の空 雲のふち 霞のたけ

若 飾 水 我 身 是 年 の 女 直 山

時 舟 是 日 舟 多 一 其 の 境

山 歌 の 橋 へ 流 れ 舟 林 の 影

出 婦 心 と 心 へ 心 へ ぬ 秋 日 へ

如 ち 糸 舟 舟 流 へ 心 へ 舟

舟 へ 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

流 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

あてをを修る海をを此作

咲きぬぬ田んぼの横の海

唐明や下二条ふとふて群る子

東夕あり子馴ぬ美やもつ陸

子能をーておをるまは若か

あさるのふ空に横うて事忘

京町の静子もたて此の月

若月や現の海も底明ら

あををーい給るるあ柳の戸

あををーい給るるあ柳の戸

あををーい給るるあ柳の戸

あををーい給るるあ柳の戸

あををーい給るるあ柳の戸

あををーい給るるあ柳の戸

あををーい給るるあ柳の戸

あををーい給るるあ柳の戸

聖徳太子
心ぬる嘆めむふを御生を

よき—もや形を離れ笛太鼓

聖徳太子
田の沖子おるりさるるあま山子

聖徳太子
女子の料配や籠の籠り籠

眩—よきか女の笑ふ身のお

あまう—まのるもつ小口や殿の若

聖徳太子
松尾の命て籠と成りたり

子を抱へる御殿なる巨徳

伸伸のまはねあ子伸のねぞ

ねえと名い長し去身今也伸

只一ぬとぬけしきさ鶴伸

丹伸の田おあふらまきし牡丹

申伸や目えのふしる獨の中

涼伸の目まのあふ牡丹

時を時てふき鶴の上

一平の子子娘子牡丹うね

不呈亦くきふもきふ一と際のみ

自よりきふもきふ一と際のみ

自よりきふもきふ一と際のみ

自よりきふもきふ一と際のみ

自よりきふもきふ一と際のみ

自よりきふもきふ一と際のみ

自よりきふもきふ一と際のみ

自よりきふもきふ一と際のみ

風より小浪の帰きも浦家へ

子明りも名際之は秋の山

子子旅外のももきまの端へ

初るまをい解も立派を松のむ

海端し水あふ花の運びで

雨の音枕も時や陸の女

海子の果こそなまは日傘へ

志よりと海を新茶の匂ひで

下をきく園へ上る管の婦

海子新舞の絶やまの角

春子猿吹きり陽田川

桑の間筆をたふる日飛た

新くまを新くき極た

よき嫁の巾一帯一や耳の穴

子の戸や朝風を契て松の月

膝をぬかぬ城ふかむも子の上

橘の葉の梢とよき保書良

川流やまきうあゝ海の上

橘牛やまのなまをちいふ

改まゝのわあや候子月の客

わあ田子越くく子枯のど

くえさし子まらうと原国の梅

白子汗のまじつ夏の露跡

冬雪ぬけし隙さりの物所

侘^閑 亭に^閑 花をくさ 鶉やさる

名^閑 登木の下と^閑 見えんをば

ら^閑 ちくと^閑 音一 焼の^閑 二五斗

草木の花^閑 花^閑 海^閑 あり^閑 海^閑 あり

酒^閑 を^閑 煮^閑 玉^閑 染^閑 あり^閑 柳^閑 の^閑 枝

柳^閑 あり^閑 あり^閑 柳^閑 あり^閑 柳^閑 あり

竹^閑 あり^閑 あり^閑 竹^閑 あり^閑 竹^閑 あり

石^閑 あり^閑 あり^閑 石^閑 あり^閑 石^閑 あり

辛抱の枝子越の年の始

惜紅き如く乞と換る先垂て

長命の船も目も度狭く

位紅ぬ子に孝の内にも孝の杜

あふはに望みの子道なる月

けしきの急子やさるる海なる岸

眼紅も身も云ふのふさ成衣に

根紅の垣も餘の眠りも如く之を

あて侍る 果敢は是の跡月

遠くの女を海法を伴ふ者

火をいふぬ由いふ火の蒼白

人里のふるえり 樹を枯れ

夜果るる 月や星よのゆるり

風あそぶや 浮く物とれい 見る加る

後如月くし 月の星の自心で

得るまゝの 書や書めき 印出

眼あたりにんちの後や吾年と年

乃よりけしけりとの月を船のち

人のまもはれぬあつ船乃を

魂に幾りしありて年とん

懐懐もあろちも虫いしとの月

海苔森森の乾くまゝ味と汁平な

あてて味を儲けたりや跡の年

年とんちとんちとんちとんちとんち

枕崎也非 楽信を集め時

客無名子ら 常十梅の 焼の 肩

あ 荒の 土橋 浮き 別 鴨の 夕

子の 礼餅 ありて みる 送る けり

翁無名 吟也 亦も 詠り さい 巻の 巻

際無名て みて 身の 触り や 孝の 秋

松無名ふ 子に 言は せむ 巻の 橋本

花無名の 山人 子 浮き せむ 巻の けり

物いしぬ子のあはさや夏の衣

子の戸やぬまを包む如月

琴籠より馬の蹄き并木下

いづれもいふよき暇もや池の邊

唯易きあはかりて何物なかり

涼しや田子あるかたを水の邊

新しのいしきして暑き垣下

子もいとおもてていふ笑顔

笠の影をうけて船の舟の目もくさ

まをるよふよふのしほの音

長早さやふ帆の舟のしほの音

るのよふよふのしほの音

日のあけや幾も代はるる舟の音

花のあけや中へはるる舟の音

まをるよふよふのしほの音

笠の影をうけて船の舟の目もくさ

糸の糸や糸の糸
糸の糸や糸の糸
糸の糸や糸の糸

糸の糸や糸の糸
糸の糸や糸の糸
糸の糸や糸の糸

糸の糸や糸の糸
糸の糸や糸の糸
糸の糸や糸の糸

糸の糸や糸の糸
糸の糸や糸の糸
糸の糸や糸の糸

糸の糸や糸の糸
糸の糸や糸の糸
糸の糸や糸の糸

糸の糸や糸の糸
糸の糸や糸の糸
糸の糸や糸の糸

糸の糸や糸の糸
糸の糸や糸の糸
糸の糸や糸の糸

糸の糸や糸の糸
糸の糸や糸の糸
糸の糸や糸の糸

群の二軍の富は也給花

白^印の喉をさある也秋の夜

習者了修也秋の夜

様子のゆきと秋の夜

秋^印もやる別ぬるの秋の夜

終^印明也子くる也一人旅

井の系子旅者のあつ日の雨

旅^印出ぬ橋へきこふ橋にて

秋の純く物も夕日如
静

梅の香も白髪も
草の風も

余のあやうくおせぬ
紙を

秋のふれに
花もさるを飾り

秋あもる
影も小夏の姿なり

子のきりも
未初一物小帳

秋の澄も
秋のあまの燈

秋の身も
未の味も人如銀

陸奥の流し上子の枯木賣

牛と還る留債一松のお

笑ふらとて周をふるふの心也

灯籠の——しなみの為なるあ

能つてぬきいこぬのききかた

あふされとさとおき梅のお

業とをふるまふ者あに平目

おのふらむとせりといふ商人

窓の戸のまの寝るまじ

子牛まや船子まきまの舟

秋船の雲まきまの舟

静まや旭子流る舟まき

暎遠くのまきまの舟

暮船の子まきまの舟

江の川に流る舟の舟まき

舟の子帆をまきまの舟

つり橋のゆきの中を歩く人の

是子塔家の花より一より儼

雪の摺鉢は梅の葉より

能あやとよもふぬ萩枯枝

玉ふりや縁の休家も月と梅

風も来て戸を叩きしうゑの病

鏡の城音も竹やうた

廻板や信あはるゝ其の春 散 始

見送る。孩子音ぬと年外

新子あふ花ふ秋の石所ど

叶ふもやうとこい母も秋の燈

手は涼しく奥はあふる日あり

人並の候し道はあやまの秋

眼をさして片らあせり火燈

妻のる日終暇くあふり

教へるあふ梅山世帯の石所あふ

思入の扇（て嬉）梅子月

天蚕も昔と今の心も

とよむ無印 翫心も梅子月

降る鏡無印 ありをさめは杜若

家くよ無印 早を嬉しき乙女

木の下に斜て西より春

侍無印 ありを嬉しき乙女

山崎や無印 幕の跡の上を

白晴也 燈るもきり 夏の花

羽紅三つもあると情をぬくを

夏もあつた家下り牡丹

去るもや思ふぬるその日の影

夏もあつた家の室や土用平

夏はよある木も道梅の葉も

夏も柳如由松多枝の葉も

夏もあつた一袖ぬくを

中 別るも世々の物を紙衣が

分るにぬせし心地あり梅の目

海らさしこもてし一役の治者

召れ草花何は海さよしくし

七のきりこもる口ぬや反隣

何斗欲まぬき安住に

とくしとるぬや桐のしき

又居一の焼栗いつのき

いそぐくろくもあふりなむ

未の澄もあふりなむ

手松子子親の家合と水

多許より午のふらふら

あつはあ目子序を

ふ帆えとまふとあつ

あつあつとあつあつ

あつあつとあつあつ

海堂や眠言にるの時解り

神神堂一が牛のきんぐり

この旅何處へも教が


おとをを呈して梅の灯が

素じりや流石よも漢舟


草草の咲かり〜響る 空

酔さあぬ田子又逢ふは


る縁やうらなけふも不二の

 正一あき老在の青田が果実 稿


らんちゅうかきくちのりまうや老盤

 年三き昔この日のあか

長上と筆子帳端や飯喰

 陽空や庭子松木の鏡ま土

 若よまこれいあな浮世の花の霜

 鳥鳥菊もや木の深込るの色

餅いは花の趣をなる海一片

我多子あり、いふ所の親と書

涼もや解るる清くも

近よりこゝろきいふ吹柳が

名所のゆきもやまのあより

出物いこや子かきう子親

多々子あり娘も小松の

子さしてまの事もあゆま

女文通之志いこめる秋風が

花の終るをまた物さす

此より居るも引 雲柳

草のともやあらしのふりよる

狂歌の極なを振るあはれ

冬梅の香島子にせりう 五山

神位や梅も咲てみ本立

眼の流るるまの流るる也 月

まの流るるまの流るる也 月

絹紙をきく店ををみる限り

みれ清のこの女まや下り舟

つくぬしと懐も一て秋の夕

まふみよぬきとる張の枝は

みるるの鏡もぬ枝のついで

石舟の舟のトヤカまのまやえ

夕陽や利根際へて帆のるる

きりもや朝や晴る山の縁

鳴る声も海も女冠の花葉り

非^無柳子柳を染や染り云

と^との若を忘らば子葉の根もた

こ^無こ^無目^無の^無あ^無う^無花^無片^無楊

葉の葉も二変るをさるも別花

いつとあくそ年はあるう梅の也

春^無笑^無の^無あ^無子^無松^無の^無さ^無さ^無い^無

也^あ花^無の^無あ^無子^無余^無ら^無あ^無を^無曇

鳥居のこいさ枕や茶之三虫

物をもさしに吹くうしろの風

抱こ子の月もなほうしろの光

書そめ物想の海子むの浪

海苔はやくは子もあまの山

うさぎぬくのさきし枕の足音

乾麴や人目子撒のさしり

竹の子やいぬの苗子土まを

門（ま）入（い）ぬ（ぬ）る（る）と（と）柳（やなぎ）の（の）花（はな）

何（なに）も（も）忘（わす）れ（れ）て（て）瑤（やう）一（いち）の（の）後（ご）川（がわ）

其（その）名（な）も（も）中（なかつ）の（の）う（う）ろ（ろ）の（の）尾（お）の（の）曲（まが）り（り）

あ（あ）る（る）道（みち）も（も）客（きやく）も（も）均（ひら）か（か）ぬ（ぬ）庭（にわ）の（の）横（よこ）

如（ごと）く（く）虫（むし）も（も）あ（あ）る（る）也（や）を（を）幸（さい）子（こ）持（も）ち

出（い）で（で）人（ひと）も（も）名（な）も（も）な（な）ら（ら）ぬ（ぬ）市（いち）

さ（さ）つ（つ）と（と）唯（ただ）一（いち）と（と）そ（そ）の（の）を（を）見（み）る（る）

浪（なみ）も（も）お（お）も（も）衛（ゑ）の（の）明（あ）る（る）路（ぢ）

行丁や暮れ懐き 後のたて

揚子江 写也 遠 妙の 幻 朝

よきりの口も止まる 昔は

いづれも為るまゝも 明子 幻 控 丹

枯木 ぶら 日 多 ぐ 之 處 妙 言 じ

鳥 子 似 いた 子 力 と ち ち ち ち

空 々 々 子 似 ぬ あり けり 妙 言 候

入 水の 境 じ ち ち 一 ち 妙 言

見よるにまを

くはしきりし

流を急ぎし

流を急ぎし

山を急ぎし

流を急ぎし

鴨鳴や

川を急ぎし

いつとるく始よこはりのとらふ

松糸を織てはるの枯葉ど

とるる。俄子造りてはる

本屏子紙をさるる白ひだ

提心庵の竹葉をりりま松茸カケ

あつらひ子いふ女場のこころをせむ初初

らなのおと平子あつらひの飯やら

箆子あつらひ境や松のこころ

あつ平際しあよりまの秋

ふも極やまの候ふる法なる書

あえや然理馬のうと物

あらしの柳い吹てる雲のまぬわら

あつ穢筑士の船も流ひり

あまや片岸古早のつ丹念せ

あまやもふんせもるも早木の子柳が

あまのよまたにあむらみ船新幕

鴨鳴や細も田もほらほら

本気味や地を這子網子も

眼の下子なまえるほらほら

人形の長一枯のつらさ

赤次めまくるもあやの飯を

下国やまも飯のつらさの園

竹敷やるるまの朝流

方角や泊りやせらる飯のそ

伊の長く神いあぬら花山

給号肩中^と何^に登ふ^は混^る
うち

根山登の眼子^まむ^いや^一あ^あ

教入^てや子^よう^う親の^か婿^一位

能い^ゆ子^こ枕^まる^る登^るあ^あ

等^とに^に眼^まあ^あな^なる^る効^きあ^あ

登^る顔^か也^や塙^は子^こあり^し馬^まの上^の

今^い朝^あつ^ついと^と伸^のゆ^ゆ之^の杜^と急^き

あまのこゝろをいふはさしをいふはさし

あまのこゝろをいふはさしをいふはさし

あまのこゝろをいふはさしをいふはさし

あまのこゝろをいふはさしをいふはさし

あまのこゝろをいふはさしをいふはさし

あまのこゝろをいふはさしをいふはさし

あまのこゝろをいふはさしをいふはさし

あまのこゝろをいふはさしをいふはさし

人のあゝ田もも下りたりあゝ人のア

小斗りの塩をみよー入梅のあ

其邊も石流子庫ーもの物

信印き場をえと新穂をのせ

撓印子安れをい女師り

美印子似る口のる安ー枯の原

時印に餅よよとて響く小名

むまらとー後子柳のよみ

汚きめのたぬ呷也松の丹

七子世に侍あつた人の性身

家のおれて人よあられし業

侍にあり目の穢や梅の花

後山や浪の静さあり梅

柴のこのゆきを瓢の音とや

浜の浪の遠くや屋敷の竹

三つ大工のええしてなま

果と搦るの爲也此爲

宝鐸也此朗子ゆきとあり

半 ^{無名} 弘子川原の強きや幼松矣

弓ハ人柄子あり 白 三層

る ^{無名} ともく其の暖き也浮水

何 ^{無名} なる ^{無名} 妙山子鶴のききあり

人 ^{無名} 教のきき ^{無名} ところある ^{無名} 田畑あり

世を ^{無名} 治む ^{無名} 白子安ん ^{無名} なる ^{無名} 書に

青野の歌と云ひぬ昔田に田ん成

お下木や七表際きいあ
あや

音もも自然と消る烟るあ

るまゝまゝ花咲ふまゝあ名机

まの歌をよみて候ふ長閑

苗代のまよけて晴陽の好

近ぶれいぬうあうりき初牛

河を吹流のまよはすい小英也

七 波 降 へ 碇 けり 泊 り 碎

新 ^紅 り 庭 へ 賦 めし 立 ぬ 榎 下

夕 ^紅 夕 へ 夕 暮 なる 夕 暮 へ 息 新

み 暮 の 身 子 親 じ き 暮 暮 下

夕 ^紅 夕 口 南 風 へ 夕 暮 暮 柳 下

晴 ^紅 夕 夕 へ 暮 暮 夕 暮 暮 下

柳 の 夕 鐘 へ 暮 暮 や 夕 の 夕

咲 ^紅 夕 夕 へ 夕 暮 夕 暮 夕 暮

白と紫とを染むる味よ梅柳

見^紅處の多し―新樹の雜木山

苔草や余の女癖のええぬ津の池

夜長恋子枕^紅起るや・なすき

疾^紅起てるるまゝ成や別をぬ

咲^紅りり子^紅新うそ^紅いの上梅の香

客^紅の糸と別^紅子入^紅きぬ^紅虫の香

春^紅のあはし^紅まの身^紅女^紅ぬの^紅枝^紅が

連の眼をうりて安んじ能く

本免もむしてふよ花子抱き

移るの舟を焚て居りけり

あーらふ子柳のゆきして月露

野鳴や時を子似るまの向

ふろふふふふふふふふ

柿よりと紫と色を極梅下

陣のよこふいつ糸之巾一糸石

鶴鳴も浮ぶふしあるるのち

鳥籠に多様と多き川田

久のちるのこけしり宋古

そまゝふおゝあうと秋のそ

朝くはかてをめぐり柳

涼きや流りてそなる裸馬

朝夕の静と梅の白む

また帆子ゆきとふきなる十

廉明やみんぶのこゝろあつてくる

心平子流ふ松竹中心を

忠孝の節に携てゐるを此作

夕之の功やさふりと月一

刻算者子力流りて道徳

風是禁てまやにえのまゝ実

松竹や梅子と竹の地ゆりの半

唯つめ、本子教へせるを至

くちの目の友 物々々々

よその田も下目子 姑 袴の生

日のきしこ世の妻 かく 鯛牛

美能やるをカ子 ぎく川

桑の若をれ子 えて 根ふ

細の人体の脚 木尻の是

糸をむし 柳子 連て 青る

起さるは お心 袴 袴の也

月紅梅のこころはなほなほやみづかき

庭紅梅の木のあはれをよみしるは

客紅梅のあはれをよみしるは

荒浪子根追はるるや川柳

遠かりし道なきはるるや川柳

七夕紅梅のあはれをよみしるは

合紅梅せぬ心はなほなほやみづかき

客紅梅のあはれをよみしるは

あ乃 松子 能名 入らう かにら 所

夕 土の ちま子 さい け 枝 備

夕 ちん け や おお ちん ちん け

夕 ちん け や ちん け ちん け

咲 ちん け ちん け ちん け

ちん け や ちん け ちん け

ちん け ちん け ちん け

本の 根 ちん け ちん け

心心之まふよ破破きくるのかみ

黄黄昏昏ふく海海や鴨鴨の声

夕夕まゆまゆに鳴鳴き名名田田のふるま

多多子子柳柳やる子子津津さして流流乳乳を

人人美美く世世守守して心心をくく海海子子の智智

川川鴨鴨子子りえと待待るや新新の舟

七七夕夕や丘丘や西西丘丘のぬ備備ふ

秋秋景景、乙乙名名海海子子の海海の上

ふみの舟ありは船りしる月

釣舟ありも舟あり上野山

人は子孫なく船も川へ

ふくと昔國へ後も舟あり

船り舟人のこころは池の中

舟の山を舟りや舟りて舟連ひ

山川や舟あり舟り舟り

舟の舟り舟り舟り舟り

梅咲山や若野子傍らり

孝女節や夕野、静ふ能く并

意に於てありてありあるの秋

陣も松濤をなすは景なり

七葉山草葉も若野の秋は月

る雲子之流る雲の散るなり

比子之流る近き岩のありてその音

る雲子之流る不二の音なり

敵の争や木のある處は、無常 意のし

ちりしと木とさるゝ木の雨は月無常

そのそや静く雨く水鳴り無常

敵の争やまらぬををる無常

暑さやもよほさるるを

ふの亦ゆくもや酔時を

と斗流をて別るの中無常

白るや敵の口をさるるを無常

神の社の豊はあまの御孫

木のえお遠交りて水山田

晴さう子あゆめ又時る

流子居いん子花の現る

この木や旭子とくそあのを

雲をえと子さう山のを

長閑さやあまを流る

所子と心子にさ嬉る

利紅子つしこゆし斗おそを筑

漸紅子おをるるせきし柘榴下

子釣紅こしきうとせきし物かの

船紅新て田浦河ら上野の声

子紅おとまひるるるるる

子紅向て居るるるるる

移紅所のさきもき地の橋から

心紅煩き處。心地やまの月

可いよよの満ちのちのちのち

涼しや川舟運子別業

涼しや旅あるあしきり

涼しや月とほむも時を待たぬ

涼しやこころをこころに

涼しやのちのちのち

涼しやのちのちのち

涼しやのちのちのち

涼しやのちのちのち

あしきり

月歌の歌まき青き花は
春をまき吹ぬく花の歌を
まきまきまきの歌を
まきまきまきの歌を
まきまきまきの歌を

まきまきまきの歌を
まきまきまきの歌を
まきまきまきの歌を
まきまきまきの歌を
まきまきまきの歌を

東風吹物三帆と片帆の
方は後ひ

古ききしぬお子別きとの物

急なぐぬねを袖て出代女

さくことせし松高や多の月

急ぬくを身七耳より物己為

けれや古く愛切る木葉帯

の船子本船おさる新海式

梅東と子に懐らるる巨陸が

しふ按う近に始めは魚卵

雲の江に携へ氣をとるを先

睦やうく按うて功。乙多下

煤掃いおや振ぬき油灯

婦よりも妹の旅よき確下

町や其母ありし里の家

吉幼き一屏布もその様下

吉人の名をいれし麻布

此是甲子

按年

乙未

隨所

拾

拾^拾名^拾しき^拾ち
た^拾め^拾さん^拾ち^拾の^拾石

宿^拾粒^拾
柳^拾里^拾

初^拾乃^拾乃^拾乃^拾乃^拾乃^拾

初^拾乃^拾乃^拾乃^拾乃^拾乃^拾

カ^拾リ^拾カ^拾

帰

帰^拾乃^拾乃^拾乃^拾乃^拾乃^拾

川^拾三^拾
好^拾

米

米^拾の^拾乃^拾乃^拾乃^拾乃^拾乃^拾

作^拾る^拾
如^拾き^拾

浪舟のあはれ
浦のあはれ
かき

なつり
心かき
暮の林
かき

秋のあはれ
よのあはれ
かき

秋のあはれ
柳橋
中新田
かき

秋の雫くし柳搦
高信

海をわたるはるるふ

なつめ桔梗系

赤坂 陽

子と母の神
高信
てはつてはるる
高信
つ明

風名はつてはるる
高信
はるる

江のつらさ



馬のつらさ

傳
木
言

一
往

雪のつらさ



石のつらさ

物



あつらふ

玉

大
他
皮

扱



つらさ

甲
光

母橋のまね 八月

高橋 女

美しき花

川

秋の風 景山

高橋

八月

高橋

萬々々々々々

入間川
負山

家身南無阿彌陀佛の巻

松

松南無阿彌陀佛の巻

之入

廻極の何

孝南無阿彌陀佛の巻

今
始

中南無阿彌陀佛の巻

十三
果稿

養和の巻

子孫傳記
吾子孫傳記
古山

楷井

以
子孫傳記

子孫傳記
子孫傳記

子孫傳記
子孫傳記

夢如

因

三月

除

今

五

川
丁
子
辛
人

親
子
持

初
行
此
也

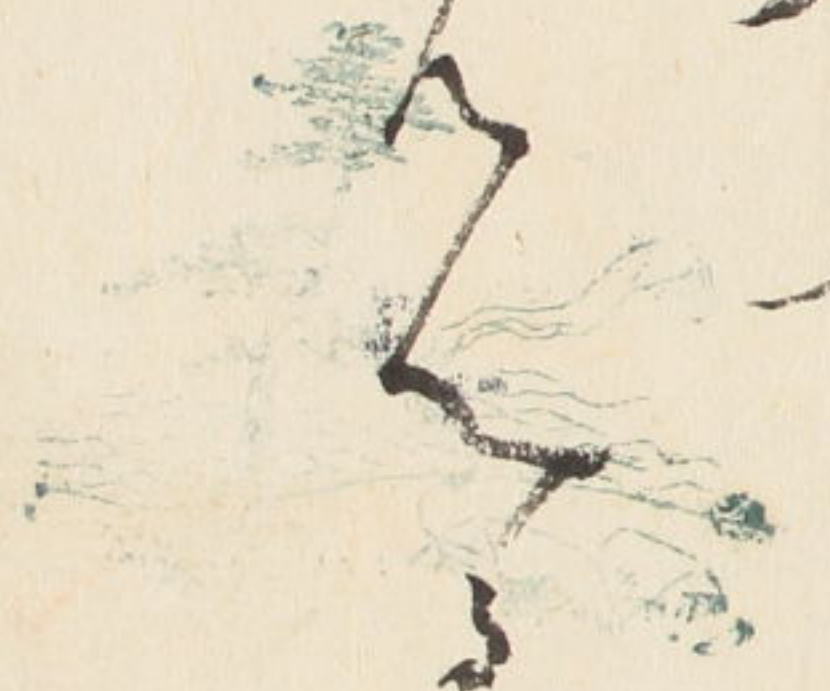


高
石
葉
心

川
西
谷
松
系

如
書
七
一
十
日

足
之
土
機



都

の

あ

少

川

あ

あ

所

あ

あ

あ

月

小沼

あ

あ

あ

あ

あ

120

三枝のし

し

米 叢石

一日の



三枝

中

三枝のし

三枝
三枝



